

## モリエールⅡ：医者諷刺

— 宇 京 頼 三 —

— I —

稀代の劇詩人モリエールが死去したのは、『病は気から』を演じた直後、即ちその4度目の上演、1673年2月17日夜のことであった。あの頑迷固陋な医師と旧套墨守たるパリ医科大学を痛烈に揶揄し、滑稽な病人を扱き下ろした芝居を演じつつ、その演劇人生の幕を閉じたというのは、いかにも象徴的である。シナリオに書かれた如く、彼は逝った。まさしく彼は舞台上に生き、舞台に死んだといっても過言ではあるまい。人間は一分間笑うと、寿命が一週間延びるというが、モリエールは人々を笑わせつつ、自らは苦しく咳こみ、遂には倒れたのである。あの激しい闘争の日々を生きたモリエールの最後については、星の数ほどもあるあまたの彼の伝記に、その記述がある。そのいずれもが、モリエール劇団の忠実な一員であったラ・グランジュの「帳簿」における短い言及、信憑性に多くの疑問が残るが無視できないグリマレの『モリエール氏の生涯』などを根拠にしている。ここでは、A. アダンの簡潔な当時の状況描写を拝借しよう。「その日、モリエールは舞台上上がるのを一瞬躊躇した。彼は自分が疲労困憊しているのを感じた。しかしコンデ公が臨席していたし、外国の貴人要人たちも幾たりかいた。彼は彼らを喜ばせようとした。おそらくまた彼は、仲間の役者や小屋の使用人たちが、日々の糧を失わないように努めるのを、自己の責務であると信じていた。

上演中、Juroのところ、一部の見物が気づいた短い失神に襲われた。舞台がはねると、彼は部屋着で身<sup>(n,1)</sup>を覆い、バロンの部屋へ休みにきた。彼は寒いと訴えた。彼の手は氷のように冷えていた。人足が呼ばれ、モリエールはリシュリユー街の自宅に運ばれた。バロンが彼の伴をしていた。自宅に着くと、モリエールは熱いスープを飲むのを拒み、パンを少しとパルムザンチーズを一片求めた。それから彼は横になった。そのとき彼は吐血しはじめた。バロンがアルマンドを呼びに走った。モリエールは偶然そこに居合わせた二人の修道尼とひとり残された。咯血が続いた。…」そしてモリエールの従者たちが事態の急迫に喫驚し、司祭を呼びに行った。しかし教区<sup>(n,2)</sup>の二人の司祭は秘蹟の儀式に立合うことを拒絶した。一時間以上もたって、やっと三番目の司祭が到着したとき、モリエールは、二人の尼僧の腕のなかで、既に息を引取っていたのである。『タルチュフ』で信者たちdévotsの偽善を暴露し、彼らの怨みを買っていた彼は、かくして憎悪に燃えた教会から復讐され、Sainte-Eustacheの司祭は埋葬さえ拒否した。この時代には、河原乞食たる役者に対して、カトリック教会の掟は厳しく、役者は破門同然の扱いを受けていたのである。また医者と医学をあれほど愚弄したモリエールの死の床には、当然のことながら、医者<sup>(n,2)</sup>は一人としていなかった。あの悪意にみちたル・ブーランジェ・ド・シャリュッソーの『瘋癲エロミール』の末尾で、復讐をとげた医者オロントと結託した憲兵が言う。

一彼が何度も侮辱した医者、彼は身銭を切って、楽しませてくれるわけだ。

一よろしい、恨みを晴らした医者のため、乾杯にいこう。  
(n,3)

彼はそれを予見していたようである。最後の舞台『病は気から』で、ピュルゴン氏を前に恐れ、おののくアルガンを死の直前に演じた彼は、彼の作劇術に反して自らの名前まで出して、己れ自身を揶揄している。

一全くもってけしからん！わしがもし医者だったら、モリエールの無礼をたたきつぶしてやる。あいつが病気になっても、面倒などみずに、勝手に死なせてやる。あいつが何をしよう  
と、何をいおうと、刺絡ひとつ、浣腸ひとつ処方してやらぬ。あいつにいつてやる。くたば  
れ！くたばれ！医学をばかにすると、どうなるかこれでわかっただろうとな。  
(n,4)

そしてピュルゴン氏に見放されたアルガンは絶望して嘆く。

一もうだめだ。わしはもう医学に仇討ちされているようだ。  
(n,5)

この苦汁にみちた自虐的ともいえる台詞は一体どこから来るのであろうか？また、モリエールと当時の医者と医学との、かくまでもの深い確執は、一体何に起因するであろうか？彼が医者諷刺を主題にした作品comédie médicale には、初期笑劇の『バルフィエ氏の嫉妬』のdocteurをはじめ、『飛び医者』、『恋の医者』、『にわか医者』、『病は気から』とある。他に直接的な主題ではないが、『プールソニャック氏』にも滑稽な二人の医者が登場するし、『ドン・ジュアン』にも医学諷刺の場面がある。これらに、地方巡業時代に上演された幕合劇や、パリでも芝居のとりに出された短い笑劇などの作品、例えば『痴話喧嘩』、『薪づくり』を加えれば、医学に関するモリエールの文章textesは、彼の作品総体のかなりの部分を占めることになる。確かに、R. ガラポンが言及するように、題材にこと欠く度に、モリエールは医者諷刺のテーマを繰返し使ったかもしれない。また『女房学校』論争以来、『ドン・ジュアン』、『タルチュフ』とうち続く教会と偽信者たちとの闘争に飽いて、作者に馴染みの医学批判のテーマに、立ち返ったともいえよう。しかしこの些か手垢にまみれたテーマも、モリエールにとっては、一級の芸術家の多くがそうである如く、生涯を通じてなした、その時代の社会的偏見、誤った既成観念、蒙昧主義に対する有効な闘争手段であった。それは M. et G. Milhaud 夫妻が主張するように、その重要性を特筆すべき詩人の闘争のひとつなのである。  
(n,8)

医者諷刺は、アダンも認めるように、古来流行した伝統的テーマであり、16世紀のモンテーニュにもその記述がある。例えば、  
(n,9)

「医者にあっては、財産が理性よりもはるかにものを言う」

「医者は、いかなるときでも自らの権威から免れないように、健康な者を病人にする。」  
(n,10)

またモリエールと同時代人のラ・ブリュイエールも言う。

「久しい以前から人は医者をくさしているが、人は依然としてそのお世話になる。」

「人間に死ぬことがある限り、医者は嘲弄されつつたまりと金を儲ける。」  
(n,11)

モリエールも、こうした『街学者愚弄』ならぬ、医者愚弄の伝統に従ったのであろう。しかしこれだけでは、あれほどまでに辛辣、時には激越な医者批判の根本的契機の説明にはな

らない。おそらく、G. クトンやガラボンが指摘するように、この医者諷刺の作品が彼の病人としての体験に基き、更にその根底には、J. シャルパンチエが言うように、幼少にして逝った息子たちへの深く、苦い哀惜と絶望の念が隠されていたかもしれない。それにしても、これほどまでの執拗な批判、攻撃は異様な感を与える。確かに、G. ラルメが述べるように、彼の苦しむ病気が彼の性格に除々に及ぼし始めていた影響をそこにみるのはたやすいことである。事実、彼は慢性の頑固な呼吸器疾患に悩まされていた。しかし、単なる医学批判なら、一作品で充分なのに、主要なものだけで五つもある。やはりその執拗さにはモリエールに固有な何らかの原因があったのであろう。もし医者に対する彼の厳密に個人的理由だけなら、これほどまでに医者諷刺に固執はしなかったはずである。

前述した如く、モリエールのcomédie médicale に登場する医者は、イタリア、フランス笑劇の型masqueである銜学者、博士のヴァリエントである。長い法服と尖った帽子を被り、フランス語まじりのギリシア語、ラテン語を喋り、ヒポクラテスやアリストテレスを引用して幻惑する、うす汚れたdocteurは、弁護士や医者や教授の姿のもとに至る所でみられた。V. フルネルによれば、この型は、旧来の滑稽な型のなかで、モリエールが一番多く保存したもので、彼はその伝統から殆ど離れていない。<sup>(n,15)</sup> 現実がかくも豊富な素材と無数のモデルを与えたこの型、滑稽であるのに如何なる誇張をも必要としないこの型、演劇はそれを極端なまでに変型し、因襲的な役柄、単調で滑稽な人物に造型した。モリエールはここでも先人の道に従い、自らを豊かにする。あらゆる社会風俗や、そこに生きる人々の冷徹な観察者であり、その心理と性格の分析家であった彼が、当代の医者や医学界の実相を観なかったはずはない。何人かの例外を除いて、17世紀の医者という種族の生態は、彼にとってとりわけ興味深かったことであろう。医学に関して、モリエールは優れた時代の証人であり、何も誇張はしなかった。F. ミルピエールが言うように、彼は何もでっち上げたのではなく、医者の世界を知っており、病気になると、どういうことになるのか分っていたのである。<sup>(n,16)</sup> 『病は気から』を陽気にする幕合劇は、その滑稽さにも拘らず、パリ医科大学（以下、Facultéと略記）の儀式に完全に合致したものであった。勿論、クトンが推測するように、モリエールは、医師で友人のモーヴィランなど、斯道の士から助言や情報を受けていたであろう。ある伝説によれば、アルガンの学位授与式の狂言は、サブリエール夫人の邸宅での夕食の後、ラ・フォンテーヌ、ボワロー、ニノン・ド・ランクロや、痛烈な諷刺を受ける側の医者をも加えた会食者の協力で考案されたという。教会やFacultéを敵に回したモリエールにも、大庇護者ルイ14世をはじめ、各界にかなりの友人、賛同者がいたのである。彼はそうした人たちと交わりながら、時代習俗をよくみ、様々な社会の人物群像を己れの劇世界に登場させた。フルネルの言を借用しよう。「誰もモリエールほどよく舞台に人間を生きさせはしなかった。また作者が一般的で本質的な特徴を要約させるこの人物が、悪徳、欠陥、奇癖を担わされたときでさえ、これほどよく血肉、骨を備えて、人物を生かしめたものはなかった。」<sup>(n,18)</sup> また、クトンも言う。「この時代のいかなる作家も、これほど豊かなパリ或は地方のあらゆるフランスの現実を認識したものはいなかった。」<sup>(n,19)</sup> それ故、モリエールは、医学諷刺という伝統的な所与の主題に、単純に従ったのではない。彼は伝統的な型に現実の具体的存在を加味し、自己に固有なmédecin という型を創造し、アルガンという文学典型を生み出したのであろう。それは、グットヴァースが言うように、モリエール劇の本質的創造のひとつになりうる型typeなのである。<sup>(n,20)</sup> ところで、モリエール劇にかくまでの鮮明な印象を与える型としての医者は、17世紀の

現実社会では如何なる存在であったのだろうか。以下、当時の医者と医学の実態を考察しつつ、それがモリエールの『病は気から』を頂点とした医者諷刺劇では、どのように表現されているか、そのtextesに即しつつみてみよう。

## — II —

太陽王の偉大な世紀においても、医学に重きをなすのは、いまだヒポクラテスとガレノスであった。生物学的な新しい発見、新薬、血液循環論、アンチモン紛争などを打破するには、常に両者の名前が引用されたのである。

ヒポクラテスは紀元前5世紀のギリシアの医者で、西洋医学の始祖とされる。彼はあらゆる病気には、神罰とは別の人体の自然な原因があるとし、根拠のない迷信を排して、観察と検証を重視した。しかし、解剖学や生理学とは無縁の彼の療法*thérapie*は、食養生、節食、温湯療法の自然まかせて、時に応じて吐剤、下剤、吸い玉が用いられ、刺絡がなされた。それらは、後述する如く、モリエールの時代の医者療法と殆ど変らないものである。ただ、ヒポクラテス学派の医師心得として書かれた、例の『ヒポクラテスの誓い』は名高く、古来、医道のモラルの最高指針として、現代まで尊重されてきた。他方、ガレノスは紀元後2世紀のギリシアの医者で、生理学の創始者とされる。彼は豚の内臓を腑分けしたり、猿の筋肉で実験したという。そして彼は、声が心臓ではなく、喉頭から生じることを発見し、心臓の鼓動と脈搏の関係を明らかにし、思考の働きは心臓ではなく、脳にあると断定した。しかしこのヒポクラテスの形勢観望主義*attentisme*と訣別したこの革新家は、動物からえた実験結果を、あまりに安易に一般化し、人体に適用した。加えて、中世以来、彼の教えは誤解され、その言葉と形式だけが模倣されて、教条主義に陥入り、医学の進歩を麻痺させることになった。とはいえ、ヒポクラテスとガレノスは医道の権威であり、モリエールの医者諷刺劇のどれにも登場する。例えば、初期の笑劇風の『飛び医者』で、ヴァレールが医者に変装させようとする従者のスガナレルに向かって言う。

— …ゴルジユスは単純で、無教養な男だから、お前がヒポクラテスとガレノスの話をし、ちょっと偉そうにすれば、お前の話にころっとだまされるだろう。

— ということは、彼には、哲学と形而上学を話せとおっしゃるんですね。まかしといて下さい。  
(n.21)

また当時の三大治療法は下剤*purge*、浣腸*clystère*、刺絡*saignée*であり、モリエール劇の医者たちはその偏執狂的愛好者であった。『プールソニャック氏』の第一の医者と百姓との対話をみてみよう。

— 先生、もうだめだ。病人は頭ん中が割れるように痛むといってます。

— 病人は愚かものだ。ガレノスによれば、あれの罹った病は頭ではない。脾臓を病んでいなくてはならぬ。

………

— …刺絡は何度したのかな？

— この20日間に15回です、先生。

— 15回も刺絡を？

— はい。

— それで全然治らないのか？

— 治りません、先生。

— それは病が血液中にないという証拠だ。同じ回数だけ下剤をかけてみよう。……  
(n,22)

『にわか医者』のスガナレルは医者<sup>○</sup>の服装で、とんがり帽子を被っている。

— ヒポクラテス曰く、……われら二人、ともに帽子を被るべし。  
(n,23)

『恋の医者』では、女中リゼットが馬丁の死に関して、存分に医師トメス氏をからかう。

— そんなことはありえない。ヒポクラテスは、あの種の病気は14日ないし21日経ってしか終わらないと言っている。それなのにあれが病気になってからまだ6日しかたっていない。

— ヒポクラテスは好きなように言えばいいでしょう。でも馬丁は死にました。  
(n,24)

クトンによれば、このThomèsという名はギリシア語で刺絡家<sup>○</sup>という意味である。  
(n,25)

更に『病は気から』の薬師フルラン氏は浣腸器<sup>○</sup>を手にして登場するのである。因みに、このFleurantという名は臭うsentir、嗅ぐflairerと同義のfleurerからきたものである。<sup>(n,26)</sup>フルラン氏は、実際に、浣腸後の“物体、matières fécalesが立派に匂うかどうか、鼻を近づけて検査しなければならなかった。それも、観察を尊重するヒポクラテスの教えに従ったものであろう。尿についても同様、その香り、色、透明度が入念に検査された。当時の診察は五感に頼るのみであったのである。またこの作品の終幕を飾る学位授与式で、Facultéの博士たちの設問に答えて、得業士bachelierusは、次の如き怪しげなラテン語のルフランを繰返す。

—Clysterium donare (浣腸をなし)

Poster seignare (その後刺絡)

Ensuitta purgare (次いで下剤)  
(n,26)

この答はガレノス医学のスローガンそのものであり、モリエールのあらゆる医学批判はこの揶揄に要約されると言ってもよい。この三大療法<sup>○</sup>の他に、水浴療法、モリエール自ら試みたという牛乳療法などあるが、それらはいずれも近代医学以前のもので、現代からみれば、驚くほど初歩的で、旧弊なものであった。ただ、17世紀という時代は、日本の江戸前期に相当することを想起せねばならない。日本では漢方医の全盛時代であり、洋の東西を問わず、科学的医学の到来はいまだしであった。しかし、この時代にも、文明の進展に対応した、それなりの医学上の運動があったことも確かである。16世紀から17世紀にかけて、医学は除々にその様相を変えつつあった。ユマニズムの批判的探究的精神の成果により、肉、血、呼吸、体温を形成する源が、土、水、大気、火の四元素であるという、単純な理論に留まることは不可能になった。そこには、デカルト的理性、モリエールのbon sensが何ほどか関与していたであろう。医学は足踏みしても、全ヨーロッパで科学が進展しつつあったのである。17世紀初頭から、乳管、リンパ管、胸管、などが発見され、次第に人体の生理が明らかにされてきた。筋肉の運動も記述され、心臓の構造と機能も研究され、1619年、イギリス人ハーヴェイは初めて血液循環論を唱えた。そして世紀半ばになると、イタリア人マルピーギは顕微鏡を用いて人体器管を研究し、組織学histologieを創始した。彼は毛細血管の存在を証明し、肺と肝臓の構造を記述した。オランダ人ルーヴェンフークは赤血球を発見した。然るに、

Facultéはこれらのあらゆる解剖学的、生物学的な新理論、発見に背を向け、時代遅れの古人の学説に固執する。確かに、シャルパンチェが指摘するように、モリエールが、様々な生理学的新知識をもたらした、科学的運動すべてに通じていたわけではなからう。<sup>(n,28)</sup>しかし彼は、当時大論争を巻き起した血液循環論と、それに対するFacultéの対応を知っていた。『病は気から』で、ディアフォワリュス氏が愚鈍な息子トマを弁護して言う。

……何より私の気に入っているのは、その点息子は私を見習っているのですが、古人の学説を盲目的に固守していることであります。またこの子は、血液の循環やその他同種の学説に関する、いわゆる今世紀の発見とやらの理論や実験を、断じて理解しようともせず、聞こうともしないのです。<sup>(n,29)</sup>

続いてトマが、ぐるぐる巻きの大論文、“反血液循環論。を婚約者アンジェリックに捧げよう”とすると、トワネットが絵本だと思って、部屋の飾りにするからいただくとからかう。当時の論文にはしばしば絵図がついており、よく友人知己に配られたからである。それどころか、もしこの論文が、サテンにでも印刷されていたら、それをドレスに仕立てた強慾なご婦人もいたそうである。この頃の論文は二つ折りか四つ折判のピラplacart状のもので、4ページを越えたものは決してなく、論義の対象となる課題名だけが書かれていた。またこのDiafoirus という名前は言いえて妙である。クトンによれば、接頭辞はギリシア語でtraverser（渡る）の意。<sup>(n,30)</sup>-usは学術的なラテン語風語尾。中間の語はフランス語だが、ラブレリックで、医学用語で下痢cours de ventreを意味するfoire からきている。まことに学術的かつスカトロジックな、優れてモリエールの命名である。さて、こうしたディアフォワリュス父子の滑稽さは、前述した如く、決してモリエールの誇張ではなく、また彼がふざけて、でっち上げたものでもない。1672年になお、反血液循環論の学位論文が、Facultéで審査の対象となっている。保守的伝統医学の牙城であるFacultéには、学部長をしたりオラン、ギー・パタンのような頑固で強力な反対論者がいたのである。それまで、血液は乳糜le chyleを醸成する肝臓から生じると考えられていた。この乳糜は、葡萄の果汁が桶で醗酵して葡萄酒になるように、血液に変わるとされていた。Facultéの医者たちはこのガレノスの旧来の学説を遵守し、それに頑迷なまでに執着したのである。彼らは新理論に仰天し、自らの存立基盤が脅やかされ、批判されているのを感じたのであろう。かてて加えて、デカルトがその『方法序説』で、このイギリス人の発見を《circulation perpétuelle》と呼び、讃嘆の念をこめて擁護していた。<sup>(n,31)</sup>それ故、Facultéではデカルト哲学と血液循環論はタブーであった。デカルト哲学は1662年禁止されたが、1660年代、つまりモリエールの多彩な演劇活動の時代に、パリの文学、科学サロンで紹介され、流布していたのである。こうして硬直たる白い巨塔に対して、冷笑を浴びせたモリエールに、友人ボワローがその諷刺的模倣詩“l'Arrêt burlesque”で加担する。『当法廷は、これからは医科大学へ全面的に引渡し、委譲することを罰則として、血液が放浪者となり、身体のなかを彷徨したり、かけ巡ったりすることを禁ずる。また理性とその信奉者にも、今後、三日熱……などの治療行為に容喙することを禁ずる。』この正鵠を得た諷刺は辛辣かつ強烈である。それほど、医学界を牛耳るFacultéの墮落は甚しく、知的好奇心や進歩の理念とはおよそ無縁で、不毛な形式主義的駄弁 verbalismeに埋没していた。彼らの反進歩的退行姿勢、無批判な古代学説の盲信、これらはモリエールやボワローが最も強く攻撃するものである。しかしFacultéは何ひとつ耳をかさず、そのドグマと特権の影に隠れていた。それにし

でも、これだけ批判、諷刺されたFacultéとは一体どのようなものであったか、今少し詳細にみてみよう。

### — III —

元来、Facultéとは、聖職者たちの教団のような医師の集団を指していた。彼らはサン・マルタン修道院の教会参事会室や、時にはノートル・ダム寺院にさえ出入りした。中世では、医者とは最初は聖職者であったのである。12世紀初頭の公会議Concileでは、修道僧の医療行為が禁じられた。しかし大半の修道僧や神父は、薬を調合しながら、治療技術を磨きつづけた。時代が進んで、15世紀中葉になると、Facultéは世俗化され、聖職者兼医師médecin ecclésiastiqueは極めて少数であった。それにも拘らず、Facultéと聖座、パリ司教団との絆は何らかの形で保持されていたのである。中世の穢臭の臭う医術しか知らない当時の人々は、尊大な態度を示す医者に対し、教会に対すると同じ畏怖の念を覚えていたのであろう。人の生命を左右する、いわば生殺与奪権を握っていた医者は、王侯貴族をも自らの命令に服さしめ、自らを神にも比すべき地位に列しさせていた。それ故、彼らは肩書と角帽の権威を誇示し、彼の処方に従わねば、死の恐怖をちらつかせ、たやすく病人をだましたのである。アルガンを威嚇するピュルゴン氏をみれば、それは一目瞭然である。

—わたしが処方した薬に、反対の態度を示されたから…

—そんな、減相もない。

—申し上げねばなりません、あなたのからだが悪くなり、胃腸もおかしくなり、血液も腐り、胆汁も酸化し、体液も汚濁するがままになっても知らぬとな。

—……

—4日とたたぬうちに、不治の病状になられるでしょうな。

—あゝ、お助けを！

—消化不良になり…。

—ピュルゴン先生！

—消化不良から消化困難に……。

—ピュルゴン先生！

—消化困難から消化不能に……。

—ピュルゴン先生！

—消化不能から完穀下痢に…。

—ピュルゴン先生！

—完穀下痢から赤痢に……。

—ピュルゴン先生！

—赤痢から水腫に……。

—ピュルゴン先生！

—そして水腫から生命の喪失とな。あなたの気狂い沙汰からそうなるのですぞ。  
(n.33)

このペテン師めいた医者と思かな病人の対話は歯切れよく交され、前者の偽善と後者の愚鈍から生じる滑稽味を倍加する。とりわけ、アルガンの繰返す「ピュルゴン先生！」は絶妙であり、その悲痛な響きが、かえって一層喜劇的效果を増すことになる。それは、モリエール劇の随所にみられるスピード感溢れる対話で、彼の愛好した劇作法の一つであった。

またピュルゴン氏が挙げる病名はいずれも -ie の脚韻で終わっている。例えば、bradypepsie、dyspepsie、apepsie、lienterie、dysssenterie、hydropisie である。J・アルナヴォンによれば、この脚韻の繰返しは人を笑わせるためのものであり、ピュルゴン役は一般に各語を bra<sup>(n,34)</sup> (強) dypepsie (弱)、dys (強) pepsie (弱) のように強弱をつけて発音したという。クトンはそこにヒポクラテスの『アフォリスム』の影響をみるが、いずれにせよ、「ピュルゴン先生！」の詠嘆調と脚韻 -ie の幅湊した台詞回しは、見事なまでにモリエールの腕の冴えを示すものである。蛇足ながら、この Purgon という名称も、意味ありげである。purger (下剤をかける) という動詞と、“*Tartuffe*” の人のいい dévot の Orgon を連想させ、やはりスカトロジイと偽善の香りがする。

さて、こうして病人を嚇し、だまして、三大療法を窮めさせた後、たとえ彼が死んでも、それは神慮によるものとされた。それに逆らうことは、ピュルゴン氏が言うように医学への不敬罪 lèse-Faculté になるのである。この医学の無能と医者への無責任さに対する諷刺も、モリエール劇の至る所でみられる。『飛び医者』のスガナレルが主人に向かって言う。

一町のどの医者とも同じぐらい、うまく病人を成仏させてやることは、請合いますよ。よく諺で、「死後に医者」といいますが、わしなら、「医者がきたら殺されぬように御用心！」とでも言ってやりますよ。  
(n,36)

『恋の医者』になると、リゼットの皮肉はかなり辛辣なものとなる。

一旦那さま、四人もお医者さん呼んで、一体どうなさるおつもりですか？ひと一人殺すのに、一人の医者で十分ではございませんか？  
一黙れ、三人寄れば文珠の知恵ということもある。  
一お嬢さまは、あの先生方の助けがなければ、立派に死ねないのですか？  
一医者は死なすためにいるのか？  
(n,37)

続いてリゼットは、ある人が病気のせいではなく、四人の医者と二人の薬剤師のために死んだと言い、更には、屋根から落ちた猫が助かったのは、猫の医者がいなくて、浣腸も刺絡も必要なかったからだと言う。また二人の医者が互に相手を非難し合う。

一先日、君がくたばらせた男のことを思い出したまえ。  
一3日前に君があの子に送ったご婦人のことを思い出したまえ。  
(n,38)

『にわか医者』では、スガナレルが開き直って、嘯く。

一ところがこの道では、人間一匹だめにしたところで、何ということはない。失敗はわれわれのせいではない。いつも死ぬ奴が悪いのだ。……殺した医者に文句をいう死人など、絶対にいませんからな。  
(n,39)

『病は気から』のトワネットも平気で言う。

一そんなにお金持になるには、さぞ大勢の人たちを殺したんでしょうね。  
(n,40)

このように、モリエール劇では、crever、mourir、tuer といった露骨な語が多出する。人の死が天に召されたものであり、深い神秘の闇に包まれていた時代であったから、医療行為の無効さは、それほど厳しく問題にされなかったし、公言を憚られたのであろう。おそらく、



モリエールは医者に対する私怨も含めて、名もなき人たちの無能な医学に対する怨念を、舞台上の滑稽な人物たちの口を通して、存分に代弁させたのである。事実、当時の未熟で非科学的な治療法の犠牲となって、多くの病人が死んだことも確かなようである。例えば、前述した三大療法のうち、刺絡は17世紀中流行し、特にパリでは、偏執または熱狂に至るほど愛好された。それはおそらくパリ人が運動もせずに、過飲過食した結果、多血質*pléthorique*になったからであろう。ルイ13世の侍医は年間47回も国王に刺絡を施したという。当時の医者は、人体には25リットルの血液があり、その一部を抜いたとしても、肝臓がより新鮮な血液を補充するものと理解していた。まるで汲んだ井戸水が新たに湧き出す如く考えていたのである。その最大の信奉者はかのギー・パタン先生で、彼は天然痘、はしか、歯痛と、ありとあらゆる病気にこれを適用した。また患者に対しても、その年齢、病状など考慮せず、生後3日の嬰兒から80才の老人にまで施術したというから、凄まじい。しかも、それは他の療法に比べ、時には生命の危険さえ伴うものであった。『恋の医者』のデ・フォナンドレス氏がガサナレルに警告する。

—お嬢さんに刺絡などなされると、15分もたたぬうちに命がなくなりますよ。  
(n.41)

それは決して誇張ではなかったのである。大革命前夜まで続いたこの危険な療法は、多くの病人をあの世に送ったのだから。極言すれば、医者はその特権に隠れて、公然と殺人を犯していたのである。ラ・ブリュイエールの言にもある。「医者の方は死なせるのであるが、香見師は殺すのである。」<sup>(n.42)</sup>モリエールは、そういう時代の社会の一つの汚点を描写しただけである。

#### — IV —

とにかくこの時代の医学は、既述したように、いくつかの実験的な試みを除けば、教条主義と形式主義の真只中にあった。その事例にはこと欠かない。今少しその実態をみてみよう。医師を象徴するとんがり帽子を被るには、長い勉強が必要であった。医学語はラテン語であったから、医学生 *philiatre* には、まず文学士 *maître es arts* の資格、即ち、ラテン語の能力が要求された。当時、*Faculté* の医者たちは、処方箋にパスカルやデカルトのフランス語を決して使わなかったのである。原則としてこの免状がなければ、「極めて廉潔なる大学 *saluber- rima Facultas*」に登録できなかった。そしてこのラテン語こそが、医者の権威を特徴づけるもののひとつであった。床屋医者や薬剤師はラテン語など知らなかったのである。もっとも、医者の用いるラテン語は、当然のことながら、必ずしもキケロ風の古典ラテン語ではなかった。モリエールは、平土間の見物に理解できるように、雅俗混雑のラテン語 *le latin macaronique* を用いて、『病は気から』の儀式的台詞をつくった。従ってそれ自体がひとつの諷刺だったのである。例えば、第3の幕合劇で、第一の医者が、阿片は如何なる原因と理由で人を眠らせるかと質問すると、志願者は *virtus dormitiva* (催眠力) があるからと答える。当時はまだ阿片の効力は解明されておらず、医学生に返答は不可能であった。然るに、同席者全員がその怪しげなラテン語に隠された無知を讃えて合唱する。

—Bene, bene, bene, bene respondere : (みごとや、みごと、みごとな答)

Dignus, dignus est entrare (よろし、入るやよろし)

In nostro docto corpore. (われらの医学会へ)  
(n,43)

モリエールはそこに完璧な verbalisme をみていたのであろう。

それはともかく、医学生は文学士の称号だけでなく、登録以前に、3名の医者の署名入りの身上調書を当局に提出しなければならなかった。また運よく医学生となっても、医学得業士 bachelier en médecine の免状は、カトリックの信仰告白をし、Faculté のすべての宗教行事に参加することを条件として、はじめて授与されたのである。即ち、プロテスタントの家系の者は Faculté に入れなかった。たとえカトリックであっても、親が医者でない者 non fils de maître は、登録や試験の際、莫大な出費を強いられた。あの強力な保守主義者であったギー・パタンがその好例で、彼は印刷屋として校正をしながら学業を続け、Faculté の学部長にまで出世したのである。こうした様々な医学生の受ける講義は、まるで宗教儀式のようであった。教授たちはとんがり帽子を被り、肩の上に垂帛 épitoge という深紅の垂れ布をかけた、長い教授服を着用していたという。このような権威主義をみると、3世紀後の現代のどこかの Faculté の大名行列が想起され、医学の進歩を別にすれば、昔も今もあまり事態には変わらないようである。法律、宗教、医学などは、いつの時代にも、権力のメカニズムに基づく制度下にあり、時としてそのグロテスクで滑稽なさまを露呈する。モリエールの諷刺が、時代を越えて、actualité を失なわぬ所以であらう。蛇足ながら、今日でもなお、パリ重罪裁判所の裁判長は黒の法服に赤い袈裟のような衣をつけ、さらにその上に控訴院の部長判事を象徴する毛皮の襟飾をつけ、それを勲章で飾っている。これに対し、陪審員はセーター姿、ノーネクタイの現代風で、その不調和かつ異様な対比は、モリエール劇の道化場面を彷彿とさせる。ところで道化といえば、あのディアフォワリユス父子の饒舌 verbalisme が頭に浮ぶが、当時の学位論文審査では、指導医 docteur-régent の司会のもとで、雄弁術が競われた。モリエール劇の医者は、ディアフォワリユス氏をはじめ、『恋の医者』の五人の医者、『プールソニャック氏』の二人の医者とも、その不毛な弁舌にかけては、甲乙つけがたい。また soutenance に提出された論文は、すべて大前提、小前提、結論という、不滅の三段論法で構成されており、その題目には次のようなものがあった。例えば、「腸の鬱熱に鉱泉水の使用を推奨すべきや?」、「くさめは自然なる行為なりや?」、「静脈の発するは心臓なりや肝臓なりや?」、「狂犬病の犬に噛まれたなら刺絡すべきなりや?」、「散髪には月相を考慮すべきなりや?」、「ブルゴーニュ酒はシャンパーニュ酒より健康によいものなりや?」などである。確かに現代からみれば、珍妙なものが多いが、これらの論文の提出者には、後年高名な医者になったものもあり、決して今日の尺度では測れない。これらは、各々この時代の医学事情、学問水準を反映していたのであろう。とりわけ、性愛に関する thèse は好まれ、「美女は多産なりや否や?」、「恋は精神病の如く治療すべきや否や?」、「歯痛は恋の情熱の徴候なりや?」などがあった。

勿論、解剖学、生理学、健康法に関するものもあった。そしてこうした題目のもとに行われた soutenance は数時間、時には連続7時間の議論に及んだものもあり、なかには、不滅の三段論法どころか、腕力沙汰に至ったものもあったという。例えば、前述したモリエールの友人の医師モーヴィランは、1658年のある soutenance で、当時の学部長のとんがり帽子を床にとばし、Faculté から4年間追放になった事例がある。

さて、医師養成には、今昔問わず、長年月の教育と訓練、研修が必要であるが、17世紀の医学生もこの例に洩れない。彼らが医師と呼ばれるためには、医学校で修得する baccalauréat だけでなく、更に学士号 licence が必要であった。この時代の大学では、医学のみならず、神学、法学に於いても、bachelier→licencié,→docteur という階梯があったのである。それ故、医学生もこの学士号を得てはじめて、医師という特権階段に参入できたのである。愚鈍なトマ・ディアフォワリュスも、二年間の bachelier、今様に言うならインターンとしての修業の後、licencié になり、やっとアルガンの脈をとれるようになったのである。もっとも、トマの場合はいまだ親がかりだが。しかしこの licence も容易には授与されなかった。ここでも志願者は、各種の試験や、仰々しい儀式を経なければならなかった。まず、登録時と同じく、医学生の身上、素行と家庭の品格 honorabilité が調査された。Faculté は自らの位階に異物 serpert venimenx ou brebis galeuse が侵入するのを極度に恐れたのである。その上、医学生は個々の教授の所へ赴き、時には病人の脈をとったり、尿を嗅いだりして、臨床的な試験を受けねばならなかった。然る後に、Faculté は秘密投票で、licence の授与の可否を決定した。

しかし、それでもなお医学生は licencié ではなかった。学士号を授与する前に、その聖なる性格を志願者 licentiande に認識させる必要があったのである。そのために、医学生たちは、学部長を先頭に、列をなして大法官 chancelier の前に出頭する。この大法官はノートルダム教会参事会員であり、また全カトリック教国の教育の最高権限者であるローマ法王の代理者でもあったからである。彼がローマの祝福を懇請し、licence 授与の儀式の期日を決定した。それから、医学生たちはまたもや行列行進をして、高等法院の議員、各国大使、大臣、パリ市長などあらゆる著名人のもとを訪れて、儀式に招待したのである。医学生は Faculté と婚姻を結んだようなものであった。

血盟団、秘密結社にも似たこの大医者家族に加盟するには、これほど煩鎖で高価な通過儀礼を要したのである。然る後、大法官は、証書を受取るために無帽で膝まずく学士たちに、一人ずつ祝福を与えたのである。アルガンが受けた儀式もかくの如きものであり、モリエールのパロディは誤っていない。学士が受取った証書 parchemin は、神と神の子と聖霊の名に於いて、パリとすべての地で医を実践する権限を認可していた。何故なら、この免状は、語の本義に於いてカトリック的、即ち、普遍的価値を有していたから。ところが、儀式はまだ終わっていなかった。最後の大宗教儀式が、寺院の穹窿のもとで、麗々しく举行されるのである。殉教者の祭壇を前にして、大法官は新学士たちに対し、生命をも賭した教会への忠誠を求めたのである。このように、Faculté と教会は、その神秘性と権威性に於いて、密接に係わり合っていた。この点、アダンが指摘するように、『病は気から』は本来、パリ大学神学部批判の作品として構想されたものが、医学部批判劇に変じたというのは首肯できる。そしてこの辛辣な諷刺劇は、単に医学だけでなく、パリ大学総体のスコラ哲学、官許哲学、アリストテレス哲学の死した、不毛の学を痛撃批判したものであるという説も正しいであろう。更に、<sup>(n.44)</sup> 医学結社とも言うべき Faculté に一等の地位をもたんとする者には、Vespérie と呼ばれた最後の論文審査が残っていた。この soutenance も長々と続き、博士号も容易なことでは授与されなかった。教授たちは決して議論に飽きることはなかったのであろう。愉快なのは、このとき docteur-régent がヒポクラテスを象った糖果 dragée を、審査会の面々に配ったことである。この儀式は l'acte pastillaire と呼ばれ、衰弱した Faculté の小児病的性格を象徴していないだろうか。長く、苦しい医者への道が、かかる微笑ましくも滑稽な儀式で終るというのは、

モリエール劇よりも現実の Faculté の方がよほどグロテスクであったからであろう。即ち、グットヴァースが言うように、「ここでは喜劇が現実をあからさまに蚕食していたのである。」<sup>(n.45)</sup> この最終の soutenance でも新たな3つの誓いが課せられるが、その中で最も重要なのは、無資格の偽医者に全力で対抗しなければならぬというものであった。この時代には、charlatan, empirique, opérateur と呼ばれるような偽医者は巷に溢れ、全くの無統制であった。パリでは、Faculté 以外の医者は医療行為を禁止されていた。1289年創立の古い歴史を誇るモンペリエ医科大学さえ、その例外ではなく、むしろ最も警戒されていた。このモンペリエ大はそのアラビア起源のため、Faculté から蔑視されていたが、西洋医学の進展に果たした役割は大なるものがあつた。モンペリエの医師たちは植物学と錬金術の主唱者であり、西欧世界がガレノスの『解剖学』を知ったのは、彼らのお蔭であつた。たとえどんなにアラビア医学的色彩が濃厚であれ、モンペリエ大は諸国から多数の学生を集め、西洋医学の混沌状態に一定の方向づけをなしたのである。例えば、モンペリエやトゥールーズでは、外科や薬学に関してはパリよりもはるかに進んでいた。16世紀末、アンリ4世が王立植物園を設立させたのは、パリではなく、モンペリエであつた。また、両大学ではこの二つの講座が、17世紀のごく初頭に開設されていたのに、至聖なる Faculté では、化学に全く関心を示さなかった。かのF・ラブレー先生もこのモンペリエ大で医学を修め、ユマニスム運動に大きな足跡を残している。ルイ14世の侍医は1646年から1693年まで三代続けてこの南の大学出身者であつたのである。モリエールの友モーヴィランも、ここで一時修学したという。モンペリエは、いわば Faculté の不倶戴天の敵だつたわけである。ともかく、王侯貴族だけは、Faculté の独占的排他的な規則や禁忌から除外されていた。彼らだけは、モンペリエや他の大学の医者、藪医者さえも枕頭と呼ぶ権利があつたのである。それに、何事にも権柄づくで、威張りちらす身勝手な Faculté は、宮廷での評判が芳しくなく、上流人士の不信を買っていたのである。それはディアフォワリュス氏の言葉尻からも窺える。

— 卒直に申し上げて、われわれの職業は、御身分の高い方に対しては、どうもうまいかな  
いようです。  
(n.46)

それ故、宮廷での Faculté の不評も与って、偽医者が貴族の城や大町人の館を跋扈し、果ては宮殿の奥深くまで侵入したのである。こうした怪しげな医術を操る藪医者 *médicastre* は色々いるが、大別すれば、経験医 *empirique*、大道医者 *charlatan* の二種類であろう。彼らは、ギリシア語もラテン語も知らず、野草と木の根で、あらゆる病氣、特に医学病を治癒するともてはやされたのである。charlatan が水薬の入ったガラス壺や小箱を並べたて、赤い布を掛けた机を前に、ボン・ヌッフの通行人を呼びとめて、大仰な口上を述べるのに対し、*empirique* は金のありそうな大家を選び、丁寧な言葉で上品そうに手練手管を使う。後者は一見 Faculté の医者のように重々しい態度を示すが、好機とみれば、一転して *charlatan* の流儀に戻る。医者に紛したトワネットは、渡り医者 *guérisseur ambulant* のスタイルでアルガンに語りかける。

— わたしは方々を渡り歩く医者で、町から町へ、地方から地方へ、国から国へと、わたしの能力に適う立派な材料を探しております。わたしがみるのに値する患者、わたしが発見した医学の、偉大にして靈妙なる秘術を施す資格のある患者を発見しようとしております。  
(n.47)

特に宮廷では、だまされ易い紳士淑女が多くいたのか、この種の empirique が好まれたらしい。モリエールはこうした諸国を遍歴する医者や、ドーフィヌ広場のモンドールやタバランの末裔たる大道香具師をよく知っていたのであろう。17世紀の万金丹売り opérateur は彼ら自身役者でもあり、余裕のあるときは一座を組み、渡り歩いた。香具師の団は、いわば役者を育てる温床のようなものであった。それに彼らの売る薬は Faculté の処方箋によく対抗していた。『恋の医者』で、不毛な議論ばかり繰返す四人の医者に失望したスガナレルは、万金丹 orviétan という当時流行の売薬を買いに走る。

—おーい、万金丹を一箱下さらんか、お代はすぐに払います。

—大洋とりまくすべての国の黄金もこの大層なる秘薬が買えようか？

類まれなる薬効で、わが薬の治せしはひととせでは数え足りぬほどの病なり、

ひぜん

疥癬

しらくも

マラリア

ベスト

痛風

天然痘

脱腸

はしか

あゝ、これ万金丹の偉力なり！

(n.48)

モリエールにとっては、効力なしの Faculté の医学も、ボン・ヌッフやドーフィヌ広場の万能薬も大同小異であった。しかし、大道香具師の大言壮語の口上には立止って微笑しても、Faculté の無味乾燥な屁理窟と、角帽の下に隠された墮落を見逃しはしなかった。その上、Faculté の独善的排他的体質を象徴する、決定的とも言える欠陥があった。それは解剖学、生理学の基礎ともなる外科を蔑視したことである。Faculté の至聖なる規定で、医師はメスはおろか、ランセットにも触れてはならなかった。それは医学部の尊厳と純粋性に対する侵犯となった。前述した如く、Faculté はその純血と無菌性を保つため、異種族の侵入を排除していた。それ故、外科を含めて手仕事を業とする者すべてを Faculté から遠ざけ、果てはメスをとろうとする人々に、公正証書を以てその放棄を要求させたのである。彼らの大好きな刺絡や浣腸さえも、自ら手を下してはならなかった。アルガンに浣腸するのは、ピュルゴン氏の処方に従った薬剤師のフルラン氏である。また恥部 pudenda = parties honteuses と呼称された性器管の治療も、医者には禁止されていた。要するに、彼らの目には、外科医などただの卑俗な人夫同然であり、外科は切離 diérèse、縫合 synthèse、摘出 exérèse に限定された手業 art manuel に過ぎなかったのである。道具を扱うことは、それがどんなに繊細で高等なものであっても、自らを貶しめることになるのであった。それでも Faculté は外科と外科医を自らの権力下に置こうとした。内科と外科は独立しては各々存立しえないにも拘らず、相憎み合う姉妹 soeurs ennemies の如く、長い抗争を繰返すのである。それにしても、何故これほどまで外科学が不浄、外道なものとして軽蔑されたのであろうか。おそらく、それは解剖行為が教会によって厳禁されていたのが主因であろう。解剖はローマ法王シクスト 4 世によって、1480年、初めて許された。このメディチ家と闘った法王は、閥族主義 népotisme を好

んだが、リベラルなところもあったらしく、異教臭のするユマニズムにも寛大だったようである。その後、レオナルド・ダヴィンチの解剖図や、ラブレーの解剖学講義、ヴェザールやファロッピオの解剖実験などにより、解剖学は急速に進歩した。勿論、闘いがなかったわけではなく、肺の血液循環を唱えたM・セルヴェは、1553年、カルヴァンの教唆により、ジュネーヴで火刑に処せられた。また、近代解剖学の祖とされるヴェザールも生きた人間を解剖した廉で、危うくマドリッドで火刑台に昇るところであった。一方、外科術そのものも、切断時の焼灼法にかえて、血管結紮法を考案したA・パレにより進展した。パレはアンリ2世、フランソワ2世、シャルル9世、アンリ3世の外科医を続けて勤めた近代外科学の父であった。しかし所謂医学、即ちFacultéはこうした様々な努力とその成果を、全くと言っていいほど無視し、医学教育に適用しなかった。正規の医学教育には、植物学を除いて、実践的臨床的研究は含まれていなかったのである。従って、解剖実習もまれにしかなく、しかも執刀するのは身分卑しき床屋医者barbier-chirurgienであった。教授はメスをとるところか、傍でガレノス学説を解説し、医学生がそれをラテン語で繰返すだけで、彼は心臓、肝臓、肺の位置を辛じて判別できる程度であった。この蔑視された外科医にも、chirurgien—barbierとbarbier—chirurgienの2種があった。前者はある程度の医学的素養をもち、長い教授服を着用し、大きな外科的治療をしたが、後者は短い服をまとい、腫物を切ったり、包帯しなどの軽い治療をする、殆ど薬剤師と同じであった。それはともかく、解剖の講義が少なかったのは、解剖を許されていたのが、絞首刑になった重罪人の死体のみであったからである。この時代、一般人の死体解剖は法律、宗教が固く禁じていたのである。重罪人の処刑が毎日あるはずがなく、教授と学生は解剖用に墓場から死体を掘り出さなければならぬほどであったという。従って、時たま、死体解剖があると、社交界の集まりのような趣きを呈し、なかには学問にかぶれた、フィラマントやアルマンドのような貴婦人も招かれたのであろう。トマ・ディアフォワリユスがアンジェリックを芝居見物のかわりに、解剖見学に招待するのも、故なしとはしない。

—これまたお父上のお許しを願って、近いうち、お慰みがてら女性の解剖実験を見にきて下さるようお招き申し上げます。わたしがその説明をすることになっておりますから。  
(n.49)

このように、Facultéから下男、人足扱いされていた外科医にも、勝利のときがやってきた。それも時の大王ルイ14世から直々に拝した、愉快な大勝利であった。即ち、首席外科医Ch-F・フェリックスが国王の痔の手術に成功したのである。しかもFacultéや、経験医者や大道医者など含めて、ありとあらゆる薬と治療を試み、その上、同じ病気に悩む病人たちに手術実験を一年に渡って繰返して得た後の画期的な彼の成功で、外科は大きく前進したのである。その反響は大きかった。国家の命運のみならず、ヨーロッパのそれをも、ルイ14世の腹具合にかかっていた時代である。家来たちは流行に遅れまいとして、競って、痔の手術を受け、それを名誉の称号とみなした。それは戦場で受ける名誉の負傷、いわば武勲と同じであった。そしてこのときの執刀医は、報賞金と領地をもらって、貴族に出世したのである。余人ならば剣でなすべきところを、この外科医はメス1本を操って、殿様になった。Facultéの医師は決して浣腸bouillon pointuで貴族にはなれなかったのに……。

内科が無力なところで、外科が有効であることを証明したのが、ルイ大王自らであったとは皮肉なことである。何しろ、Faculté出身の侍医ファゴンと四人の医師たちは、死の寸前の

国王を診察し、首席外科医の正確な診断を無視して、国王に牝驢馬の乳を飲ませようとしたのであった。因みに、この瀕死のルイ大王の枕辺にはマルセイユの大道医者も呼ばれたそうである。ただ、モリエール劇では外科医は、『病は気から』の最後の踊りの場面でしか登場せず、作者はそれを薬剤師と同一視している。

また外科医同様、医療活動にかなり大きな役割を果たしたにも拘らず、卑しめられていたのが、薬剤師である。17世紀の薬剤師はまだ共同組合制の組織体に属し、自由業ではなかった。彼らは薬を調合し、売り、また浣腸を施すため、医者のお伴をして患者の処へ赴く、いわば看護夫か職人の域に留まっていた。やはりFacultéがその特権を守るために、薬剤師を自らに従属させていたのである。中世では、薬剤師と食料品商は区別されず、外科医同様、小間物商mercierよりも地位が低かった。モリエールは薬剤師をapothicaireと呼んでいるが、これにはかなり貶下的な意味があり、18世紀末、pharmacienという正式呼称が与えられてからは、apothicaireは蔑称になった。しかし、薬剤師になるには、かなり長い徒弟期間と厳しい修業が必要であった。前述した如く、処方箋はラテン語であったから、その初歩的な知識も要求された。その上、医者ほどではなくてもいくつかの通過儀礼があり、登録税、権利金、審査員への謝礼など莫大な費用を要した。それ故、薬剤師はフルラン氏のように勘定書を水増しして、元を取ろうとする。アルガンはそれを値切りながら独白する。

— …でもなあ、フルランさん、丁寧ばかりではなく、道義をわきまえて、病人からそう巻きあげないようにしなくてはいいかん。浣腸一回が30ソル、ご冗談を！この間も言ったでしょう。ほかの勘定書では20ソルにしかになっていない。薬剤師が20ソルということは、つまり10ソル。よし、10ソルだ。  
(n,50)

こうして、アルガンは次から次へと勘定を値切ってゆく。薬九層倍は、古今を問わず、普遍的真理のようである。それにこの時代、薬は高価で、入手するのは容易ではなかった。薬の保蔵手段も悪く、ある種の薬、解毒剤の類は勝手に調合してはならず、当局の監視下で調剤、分配されたのである。それ故、その特権を利して、医者が羨み、妬むほど儲ける薬屋があり、勘定を水増しして財をなす卑賤な輩などと誹られた。モリエールはこの狐と狸の化し合いのような滑稽さを笑ったのであろう。

## — V —

以上、モリエールの時代の医学事情、医者像をみてきたが、彼の医者諷刺劇には、医者に好意的な辞句は一言一句もみあたらない。あるとしても、作品中ではなく、『タルチュフ』の序文と第三の請願書に若干の言及があるだけである。

— 医術は有益な術である。各人はそれをわれわれが持ちうる最上のもののひとつとして尊敬している。しかしそれが忌べきものになった時代があったし、それが人を毒殺する術とされたこともよくあった。  
(n,51)  
— 私がその患者であることを名誉としております、ある極めて立派な医者は、私が彼に陛下の御意を得さしめますれば、私をしてなお30年生かすべく、公証人の前で約定すると申ししております。  
(n,52)

好意的なのは僅かこれっ切りで、モリエール劇の医者はいつも狡猾、偽善的で形式主義的な業突張りとして登場する。しかし、医者が扱き下されるのは舞台上だけではなく、諺に於いても同様である。

—Mieux vaut aller au boulanger qu'au médecin. (食費をけちると医者代が高くつく)

Après la mort, le médecin. (死後の医者→後のまつり)

Médecin, guéris-toi toi-même. (医者の不養生)

Les médecins font les cimetières bossus. (医者は墓堀人の如し。)

La robe ne fait pas le médecin. (肩書は人の真を示さず)

これらの俚諺は、まるでモリエールの医者諷刺劇を要約しているかの如くである。こうした警句を生み出す、現実的背景をもつ医者風俗は、モリエール劇が検証するあらゆる風俗のなかで、dévots と並んで、彼が厳しい態度を示す殆ど唯一のものであろう。彼はリベルタンにはある種の寛容を、女学者や軽薄な侯爵たちには何ほどかの同情を示していた。ドン・ジュアンは壮絶な死で、その高貴さを保ち、セリメヌは十分魅力的である。しかし医者は唾棄すべき、寄生虫的な別種の種族であり、社会の厄病神である。事実、モリエールは医者をそのようなものとして描いた。そしておそらく、彼が最も強烈に諷刺しようとしたのは、前述した教条主義と形式主義の不毛、そこに隠蔽された偽善であろう。それはまず医者の盲信的な形式崇拝にみられ、先に引用したものを含めて、様々な形態のもとに表わされる。『恋の医者』の医者たち曰く。

—何が起きようと、いつも形式を守らねばなりません。

—規則に反して助かるよりは、規則に従って死んだ方がよい。  
(n.53)

『飛び医者』と『にわか医者』のスガナレルも同様に言う。

—死なれては困る。医者の処方なしに死んではならんのだ。  
(n.54)

またディアフォワリュス先生も認める。

—そのとおり。患者を規則通りに扱うだけがわれらの義務なのです。  
(n.55)

この偏見の上に、金権主義が加わり、その当擦も各所にみられる。それは初期笑劇『バルビエ氏の嫉妬』に早くも登場する。

—ほんにこれは思い違いじゃった。医者のような身なりだから、あの御仁には金のことを話さねばと思っておったわい。  
(n.56)

『飛び医者』では、ゴルジピュスがスガナレルに金子を渡そうとすると、断わる振りをしつつ、受取る。

—ご冗談を、ゴルジピュスさん、それは頂けませんよ。わたしは欲得ずくの医者じゃありません。(金を受取る) それでは失礼。  
(n.57)

この道化 plaisanterie は、『にわか医者』でも少し敷衍して繰返されるが、それはラブレーなどにも、既に使用されていたものである。ロンディピリスは憤慨したような様子をする  
(n.58)



が、金を受取って曰く。

—へえ、へえ、こりゃ、とんでもない。こんなことなざる必要はなかったんですぞ。とは申せ、大きにありがとう存ずる。  
(n.59)

モリエールはこの伝統的道化を対話と身振りで自己流に翻案したのである。そしてこの金銭の魅力こそが、医者に仕立て上げられたスガナレルを納得させる。

—ことがいつもこんな風に行くんなら、わしはもう一生涯、医者稼業をやりつづける考えですよ。こんなばろい商売なんて、他にありやしない。何しろ、うまくやろうが、まずくやろうが、鳥目はいつも同じようにもらえる。  
(n.60)

更にトワネットはアルガンを諫めて言う。

—あのフルランさんやピュルゴン先生は、旦那さまのおからだを鬻り物にしているんですよ。あの方たちは旦那さまを乳のよく出る雌牛とでも思っているんですわ。  
(n.61)

また第三の幕合劇の冒頭演説の第一節で式典委員長が述べる。

—Salus, honor, et argentum (幸いあれ、名誉と)  
Atque bonum appetitum. (金そして美食の久しからんことを)  
(n.62)

本来ならば、Facultéの学問、美德、廉潔への讃辞たるべきものが、医者の特権賛美となっているのは、何とも痛烈なシニスムである。そしてこうしたシニスムを更に強め、形式崇拜と拝金主義を綜合、集約し、その偽善性を徹底化したのが、『恋の医者』のフィルラン氏の言説である。その言説自体が偽善の告白となる。彼は二人の若い同僚が患者の前で口論し、信用を落したことを諫めて言う。

—われらの喧嘩口論によって、医術の大法螺を世間に暴露しなくても、現代の著作家と昔の先生方の間にある矛盾や意見の対立は、学者先生がみていることで十分ではないのですか？……天がわれらに恩恵をもたらされ、数世紀来、世の人たちはわれらに心酔しておるのだから、法外な策動をして彼らの目をさますのはやめにして、彼らの愚かさをできるだけそっと利用することにしよう。……人間の最大の弱点は、生命に対する愛着だ。われら他ならぬ医者は、仰々しい妄語戯言でそれを利用しよう。  
(n.63)

全く見事な三段論法的推論に基く状況把握であり、人間認識である。それは性格が自然に描写されるべき喜劇のテキストではなく、純粹なシニスムであり、諷刺である。このように話すのは決して医者ではなく、モリエール自身の意見陳述である。しかもそれは異常なほど執拗にして、かつ仮借なき陳述である。狡猾な老狐フィルランは更に言う。

—有難いことに、わしはもう小金は貯えた。風が吹こうと、雨が降ろうと、霞が降ろうと、死人は死人だ。わしは生きた者なしでもやっていけるだけのものはある。  
(n.63)

問題なのは医者 of 利害だけであり、そのエゴイズムは残酷なまでに冷たく、非情である。profiter (利用する) という語が何度も繰返され、それを象徴する。モリエールはこうした偽善のレアリテを強調するため、四人の医師をヴェルサイユの御典医などに似せて造型した。事実、死の床にあった宰相マザランを診察をした四人の医師は、各々心臓、肝臓、脾臓、肺

臓が悪いと主張したという。また不遇な王妃マリィ・テレーズは誤診の結果死亡し、ルイ大王の美貌の義妹アンリエット・ダングルテールの26才での急死は、毒殺という風聞を呼んだ。当時の見物は、スガナレル宅に往診した四人の医者に、そうしたスキャンダルの影をみたのであろう。加えて、四人の名前は各人物の性格を反映して、誠に示唆的であった。例えば、前述した Thomès は刺絡家、Des Fonandrès は人殺し、Bahys は吠える、Macroton は長い調子でというギリシア語で、ボワローの作であろうと推測されている。この四人の医者は、あのヒポクラテス医学の四体液（血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁）のアナロジイではなかろうか。<sup>(n,64)</sup>

ともあれ、これらの医者とともに、フィルラン氏は、クトンの言う「モリエールの地獄の最深部、偽善の円環」に真つ逆様に落下してゆく。そこにはタルチュフ、ドン・ジュアンなどの先人が待っている。<sup>(n,65)</sup> フィルラン的医者像に対するモリエールの攻撃はそれほど熾烈なものであった。医者諷刺の観点からみれば、『恋の医者』は医者の偽善性暴露という意味で、『病は気から』よりは辛辣である。確かに、後者でも、ボンヌフォワ氏が、財産を狙う後妻のベリーヌと結託して、アルガンに法の抜け道を教えるが、彼は公証人であり、医者ではない。ボンヌフォワの偽善は、神と教会の掟をかい潜る道をエルミールに教えるタルチュフのそれに等しい。タルチュフ、ドン・ジュアンが宗教の偽善者ならば、フィルランは小粒だが医学の偽善者であり、同じ偽善の円環に属し、同一の思想をもつ。即ち、時代の悪徳に適応した自己形成をし、人間の弱点を存分に利して己れの欲望を充足する思想である。事実、医学はそれ自体ひとつの病気であり、狩猟のようにひとつの情熱、賭博のようにひとつの悪徳になっていた。フィルラン氏はそうした悪習に順応したまでである。アルガンにとって医学は宗教、それも唯一の宗教であった如く、フィルランにとって、医学は博愛でも人助けでもなく、利己的な情熱、エゴイズム以外の何ものでもなかった。彼は利害心と偽善的各營心の塊であった。その点、彼は立派なモリエールの偽善者である。従って、『恋の医者』はより医者諷刺の劇であり、『病は気から』はより総体としての医学諷刺である。そこでモリエールの医学観を代弁するのが、アルガンの弟ベラルドである。二人は『タルチュフ』の宗教論義や、『ドン・ジュアン』の偽善論義のような長い医学論義を交す。医学を信じないのかと問うアルガンに対して、弟が答える。

—わたしは医学なんて、人間世界にある最もばかげたことのひとつだと思います。哲学者ふうに物を見るなら、他人を治療しようなどという人間ぐらい、ふざけた茶番、滑稽なものはないと思う。<sup>(n,66)</sup>

そして人間の身体の仕組については、自然が厚い帳を下ろしたので、今のところは、何も分らない神秘、不可思議であると答える。アルガンが医者はどうかと問うと、

—彼等の大半は古典学は知っているし、立派なラテンを話し、あらゆる病気をギリシア語で命名し、定義し、分類することはできる。しかし、病気を治すことについては、彼等は全くの無知なのです。<sup>(n,66)</sup>

では実際に病気になったらどうするのか？

—何もしません。ただじっとしているだけです。自然は、そのまま任しておけば、その陥入った乱れから、自ずと除々に回復してきます。……人間は殆どみな薬のために死ぬんで、病

気のためじゃないんです。  
(n.66)

更に、ペラルドは、医者と言う諸々のこと、肝臓の修復、心臓の強化、長寿の秘訣などは、全くの妄想、夢物語であり、彼等の言行は不一致、矛盾だらけの無知蒙昧の徒ときめつける。そしてモリエールの名を挙げ、彼が揶揄しているのは医者ではなく、医学の滑稽さであると主張する。モリエールはペラルドの口を借りて、医学に対して、根柢的な懐疑主義を表明したのである。確かに、彼はこの場面の多くをモンテーニュから借用したかもしれない。<sup>(n.67)</sup>しかし、彼は単なる模倣者、懐疑主義者ではない。彼には、血液循環説を認め、進歩の可能性を信ずる新しさがあった。そこには、物ごとを明晰な理性で判断し、合理的に推論するデカルト的思考の影響もあったであろう。また超越神のかわりに「自然」を崇拝し、快楽の享受を肯定するリベルタンの思想の影もみられる。しかし何よりも、モリエールには、社会風俗の適確な観察と描写、人間性の透徹した認識と分析という彼の独創があったのである。彼の医学観は無知、迷信、偏見を嫌悪する彼の合理的批判的精神に基づくものであった。想像以上にケルト的伝統に近かった17世紀にあって、彼は verbalisme に毒された医者風俗と、obscurantisme に蝕まれたアルガンのような患者の生態を描きつつ、医学という制度に潜む偽善を看取り、comédie médicale の舞台でそれを存分に諷刺、批判したのである。スキャンダルはスキャンダラスなものがあって、はじめて起る。モリエールは社会の傷をまた一つ暴露したのである。従って彼の医者諷刺の真の意図は、個人的体験に基づく医者への単なる意趣返しだけではなく、制度としての医学の腐敗、医者という特権階級の人間性の墮落を総体として批判し、笑いとはばすことであった。かくして、伝統的医者諷刺に陽気なゴーロワ精神の機智を巧みにあしらい、固有な諷刺劇となった comédie médicale は、アルガンの即位式のうたと踊りの carnaval で、その偽善の円環を閉じた。しかも惜しむらくは、モリエールの死によって、それが永久に閉じられたことである。アルガン＝モリエールの陽気にして悲痛なルフラン、“Clysterium donare / Postea seignare / Ensuitta purgare” が空と化した舞台にこだまし、“Juro” の叫びはモリエールへの葬送のひびきとなったのであった。

— 註 —

1. Juro=Je le jure.
2. A. Adam : *Histoire de la littérature française au XVIIe siècle*, t. III, p.401
3. Molière : *OEuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, p.1286. 以下, Pléiade と略記し、テキストとして使用。
4. *Le Malade imaginaire*, III, 3, t. II, p.1155 (Acte III, scène III の略, 頁数は Pléiade 版, 以下同様)
5. *Le Malade imaginaire*, III, 6, t. II, p.1159
6. *Don Juan*, III, 1, t. II, p.56
7. R. Garapon : *Le Dernier Molière*, p.157
8. M. et G. Milhaud : *Molière face à la médecine de Thomas Diafoirus*, in “Europe”, janvier-février 1966, p.114
9. A. Adam, op. cit., p.340
10. Montaigne : *Essai*, liv. II, chap. XXXVII, Ed, Garnier Frères, t. II, p.176, 178
11. ラ・ブリュイエール『カラクテル』(関根秀雄訳、岩波文庫) 下巻, p.83-84

12. Pléiade, t. II, p.1077, R. Garapon, op. cit., p.155
13. J. Charpentier : *Molière*, p.289
14. G.Larroumet : *La Comédie de Molière*, p.344
15. V. Fournel : *Le Théâtre au XVII<sup>e</sup> siècle, la Comédie*, p.103
16. F. Millepierre : *La vie quotidienne des Médecins au temps de Molière*, p.38 以下、医学に関する記述は、主として本書に依拠した。
17. Pléiade, t. I, p.1334, t.II, p.1075
18. V. Fournel, op. cit, p.138
19. Pléiade, t. I, p.25
20. M. Gutwirth : *Molière ou l'invention comique*, p.148
21. *Le Médecin volant*, 2, t. I, p.33
22. *Monsieur de Pourceaugnac*, I, 6, t. II p.604~605
23. *Le Médecin malgré lui*, II, 2, t. II, p.240
24. *L'Amour médecin*, II, 2, t. II, p.106
25. Pléiade, t.II, p.1321
26. *Le Malade imaginaire*, III, 4, t. II, p.1156
27. *Le Malade imaginaire*, 3<sup>e</sup> intermède, t. II, p.1174
28. J. Charpentier, op. cit, p.302
29. *Le Malade imaginaire*, II, 5, t. II, p.1134
30. Pléiade, t. II, p.1502
31. Descartes : *Discours de la méthode*, P. 160, Bibl. de la pléiade.
32. Boileau : *OEuvres complètes*, p.329, Bibl. de la Pléiade.
33. *Le Malade imaginaire*, III, 5, t. II, p.1158-1159
34. J. Arnavon : *Le Malade imaginaire de Molière*, p.309
35. Pléiade, t. II, p.1076, n.l.
36. *Le Médecin volant*, 3, t. I, p.33
37. *L'Amour médecin*, II, 1, t.II, p.104-105
38. *L'Amour médecin*, II, 4, t. II, p.108
39. *Le Médecin malgré lui*, III, 2, t. II, p.251
40. *Le Malade imaginaire*, I, 4, t. II, p.1108
41. *L'Amour médecin*, II, 4, t. II, p.108
42. ラ・ブリュイエール、前掲書、p.84
43. *Le Malade imaginaire*, 3<sup>e</sup> intermède, t. II, p.1173
44. A. Adam, op. cit., p.396, p.399
45. M. Gutwirth, op. cit., p.203
46. *Le Malade imaginaire*, II, 5, t. II, p.1136
47. *Le Malade imaginaire*, III, 10, t. II, p.1162
48. *L'Amour médecin*, II, 7, t. II, p.110-111
49. *Le Malade imaginaire*, II, 5, t. II, p.1134
50. *Le Malade imaginaire*, I, 1, t. II, p.1100
51. Pléiade, t. I, p.887
52. Pléiade, t. I, p.893
53. *L'Amour médecin*, II, 3, 5, t. II, p.107, 110
54. *Le Médecin volant*, 4, t. I, p.34, *Le Médecin malgré lui*, II, 4, t. II, p.244

55. *Le Malade imaginaire*, II, 5, t. II, p.1135
56. *La Jalousie de Barbouillé*, 2, t. I, p.16
57. *Le Médecin volant*, 8, t. I, p.38
58. *Le Médecin malgré lui*, II, 4, t. I, p.247–248
59. F・ラブレー『第三の書・パンタグリユエル物語』（渡辺一夫訳、岩波文庫）、p.202
60. *Le Médecin malgré lui*, III, 1, t. II, p.250
61. *Le Malade imaginaire*, I, 2, t. II, p.1102
62. *Le Malade imaginaire*, 3<sup>e</sup> intermède, p.1172
63. *Le Médecin malgré lui*, III, 1, t. II, p.112–113
64. *Pléiade*, t. II, p.1321
65. *Pléiade*, t. I, Introduction, XXXVI
66. *Le Malade imaginaire*, III, 3, t. II, p.1152, 1153, 1154.
67. Montaigne, op. cit., liv. II, chap. XXXVII